



三 柿平倉 備前守 藤原 朝経 公 御 像



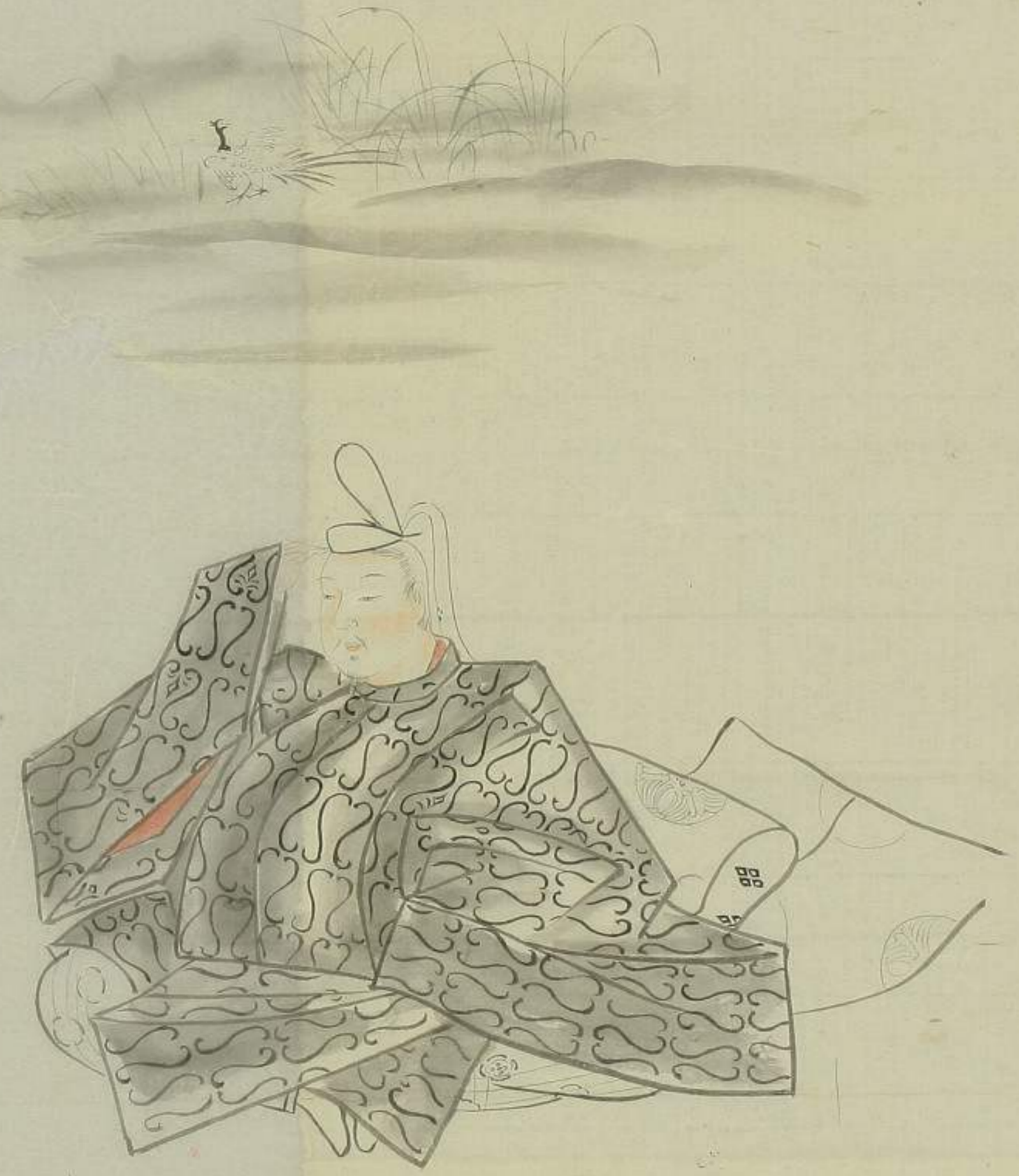
二 九河 正経 公 御 像



一 柿平倉 備前守 藤原 朝経 公 御 像



三 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語



四 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語



五 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語 昔の物語



五善性法師
乃、其の徳を以て、世に名を著せしむるに、
其の徳を以て、世に名を著せしむるに、
其の徳を以て、世に名を著せしむるに、
其の徳を以て、世に名を著せしむるに、
其の徳を以て、世に名を著せしむるに、



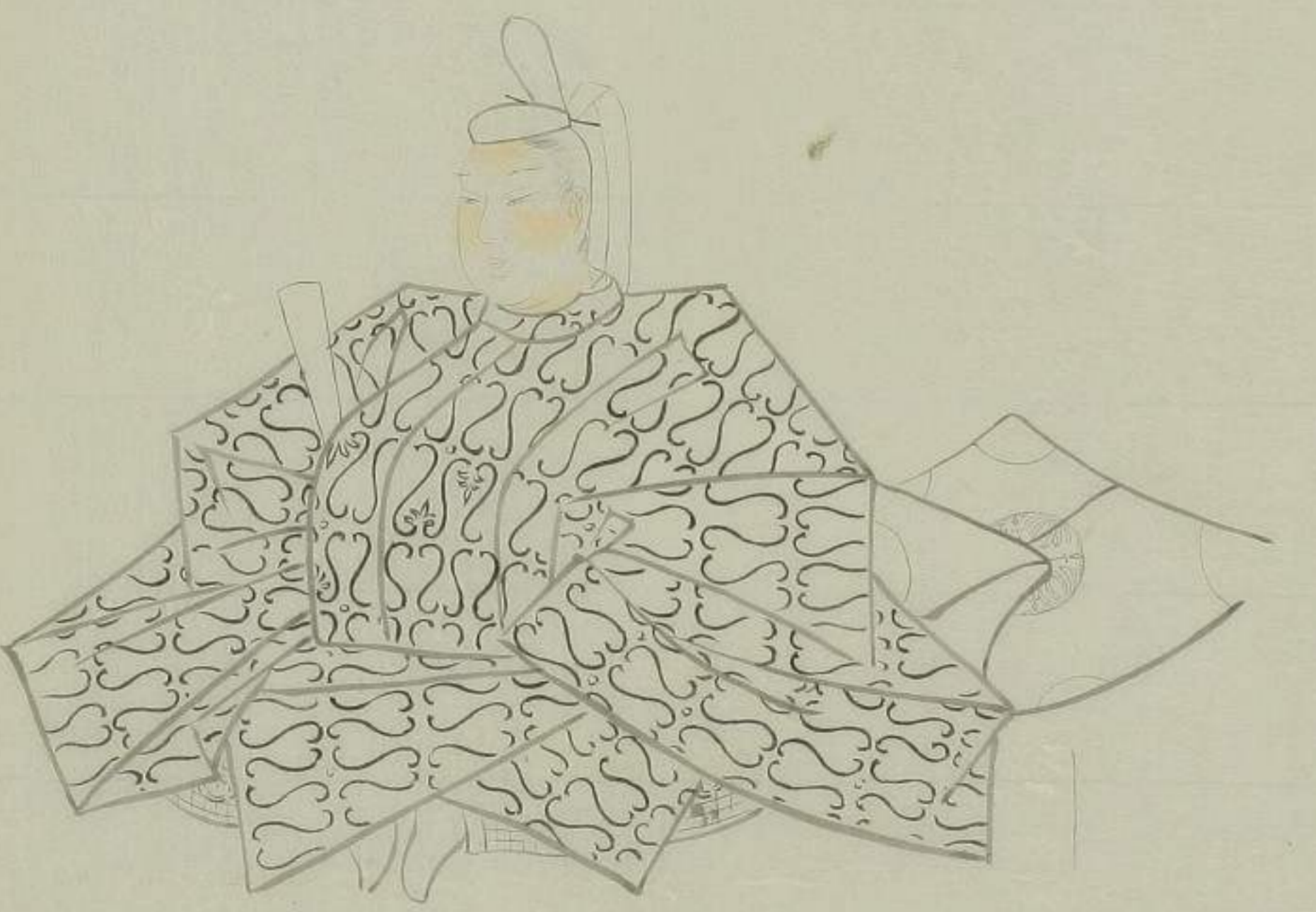
六徳花丈

乃、其の徳を以て、世に名を著せしむるに、
其の徳を以て、世に名を著せしむるに、
其の徳を以て、世に名を著せしむるに、
其の徳を以て、世に名を著せしむるに、
其の徳を以て、世に名を著せしむるに、



七中絶言無師
乃、其の徳を以て、世に名を著せしむるに、
其の徳を以て、世に名を著せしむるに、
其の徳を以て、世に名を著せしむるに、
其の徳を以て、世に名を著せしむるに、
其の徳を以て、世に名を著せしむるに、

七中紀言教忠 九一夜のあけのついでに海を渡る舟のあはれ



八中紀言教忠 信濃の海を渡る舟のあはれに山姫を更なるがよきとての遊樂



九公忠朝臣 舟のあはれに海を渡る舟のあはれに海を渡る舟のあはれ 九二五

九公忠朝臣 物やらの出立言 御座るに御座るに 九五



十齋宮御 聖徳太子の御成道に 八幡社に御成道の御成道に



十一敏行朝臣 物やらの出立言 御座るに御座るに 九五

十三 清正の御教風をのの浦の君と津の君と帝并の御教



十四 藤原興成 あきりまの心を津の君と帝并の御教



十五 板上天則 乃の御教風をのの浦の君と津の君と帝并の御教

十五板上市期 乃ノ松山ノ秋ニシテ海邊ノ心ニシテ松山ノ秋ノ心ニシテ

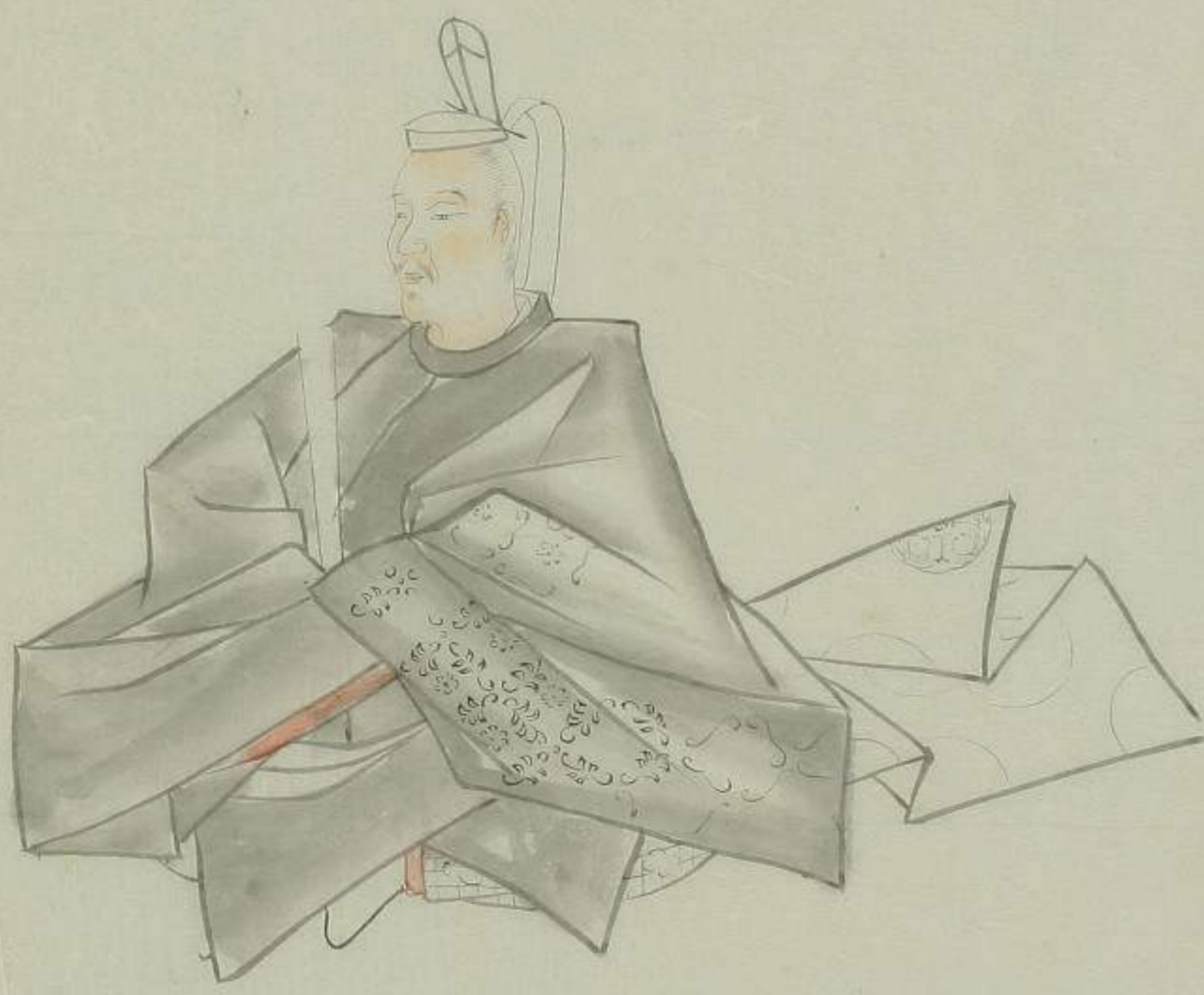


十六小大君 乃ノ河松山ノ秋ノ心ニシテ海邊ノ心ニシテ松山ノ秋ノ心ニシテ



十七徳室朝臣 乃ノ河松山ノ秋ノ心ニシテ海邊ノ心ニシテ松山ノ秋ノ心ニシテ

十七 徳室朝臣 千五百五十七年 徳室朝臣の御成程 徳室朝臣



十八 兼盛 秋の暮に色はあかり 秋の暮に物もあかりのまゝ



十九 紀實之 ちんちん 紀實之 ちんちん 紀實之 ちんちん 紀實之 ちんちん

十九 紀實の地... 紀實の地... 紀實の地... 紀實の地... 紀實の地...



二十 伊勢 三編 雲山... 伊勢 三編 雲山... 伊勢 三編 雲山... 伊勢 三編 雲山... 伊勢 三編 雲山...



二十一 山邊赤人 巾着箱 雲津... 山邊赤人 巾着箱 雲津... 山邊赤人 巾着箱 雲津... 山邊赤人 巾着箱 雲津... 山邊赤人 巾着箱 雲津...

三十一 山邊赤人 舟に泊りて津波を待たば 舟は波に漂はりて 舟破るなり



三十二 僧正徳那 終つて去りし道徳の徳を以て 天降る時を知る 念ふに記



三十三 紀友房 持たせ給はるる 事なりとも 念ふに記 念ふに記 念ふに記

三三 紀友房 持刀の姿 藤原朝臣の御代に於ては 紀友房の御代に於ては 紀友房の御代に於ては



三四 山崎小町 山崎小町の御代に於ては 山崎小町の御代に於ては 山崎小町の御代に於ては

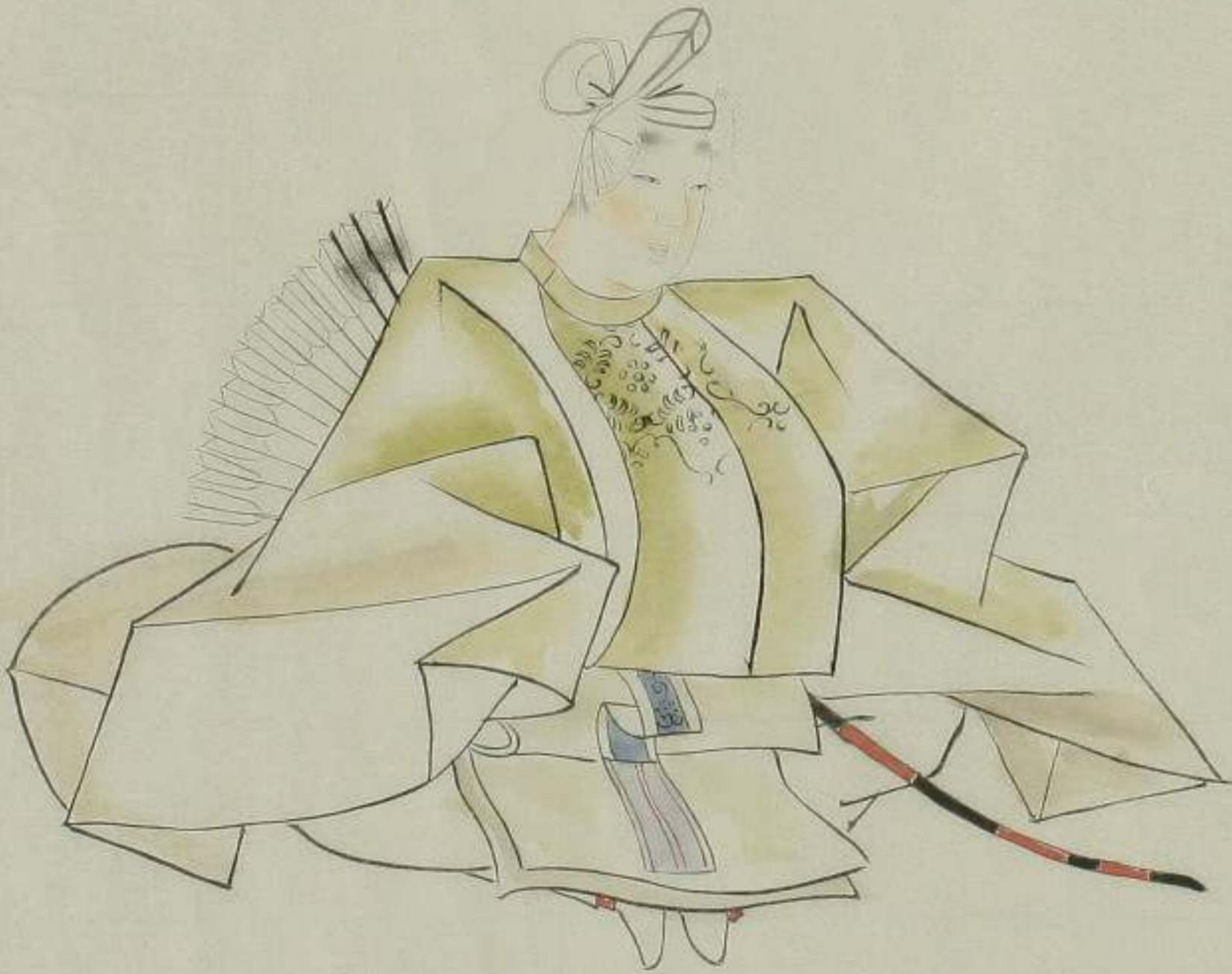


三五 中納言朝忠 義代の子 大東の御代に於ては 中納言朝忠の御代に於ては 中納言朝忠の御代に於ては

三五 中朝朝忠 義の志をたもてて死するは忠臣の徳也 今此の徳を以て 忠臣の徳とす



三六 藤原高見 人の心を測るは人の徳也 徳は人の徳也 徳は人の徳也



三七 手書忠孝 人の徳は徳也 徳は人の徳也 徳は人の徳也

二七 千重忠岑

山崎宗鑑の弟。千重忠岑の字。宗鑑の弟。千重忠岑の字。宗鑑の弟。千重忠岑の字。



二八 大庄頼基朝臣 子百々無道 孫孫入野 孫孫其乃 孫孫



二九 源重之 風流大庄の源重之の字。千重忠岑の字。宗鑑の弟。千重忠岑の字。宗鑑の弟。千重忠岑の字。

三九 源重之 凡物乃其心之海也 心之海也 心之海也 心之海也



三 源信明朝臣 亦幸 後乃 凡物乃 心之海也 心之海也 心之海也

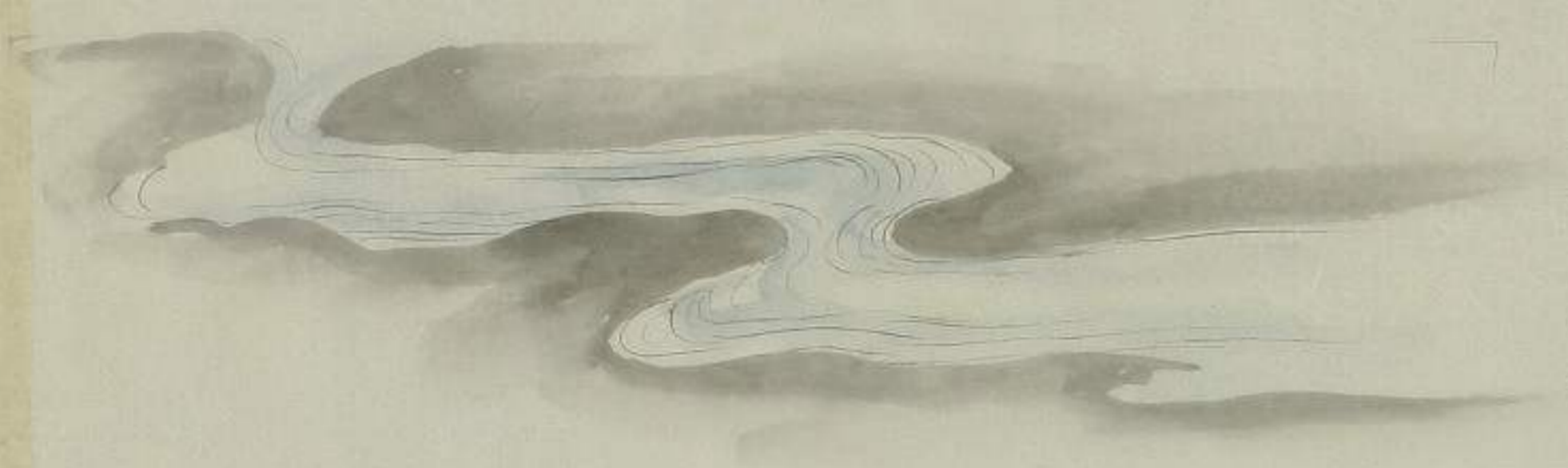


三 源順 亦幸 後乃 凡物乃 心之海也 心之海也 心之海也

三十一 藤原頼朝 水もたつとて日るるや波のたれをうきあはれつる事かたの



三十一 藤原頼朝 波もたつとて日るるや波のたれをうきあはれつる事かたの



三十一 藤原頼朝 水もたつとて日るるや波のたれをうきあはれつる事かたの



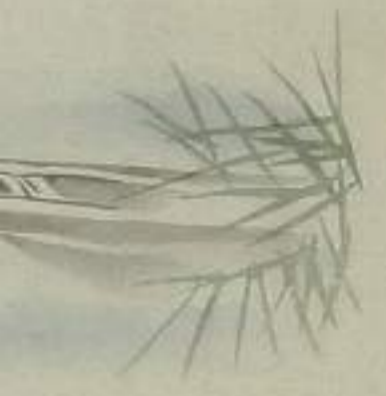
三十三 藤原元真 竹葉のついでに我が皇朝のたのむべき御事ありと云ふ



三十四 藤原仲實 展の月と雲の御程に世のいづくの御事ありと云ふ



三十五 壬生忠見 心持のついでに我が皇朝のたのむべき御事ありと云ふ



三十五 壬生忠見 比叡のつとめをりてははるかにあはれみ給ふ御成り



三十六 中務 林風頭よりいせのまはるかにあはれみ給ふ御成り

